

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 26 年 6 月 25 日現在

機関番号：17701

研究種目：基盤研究(B)

研究期間：2011～2013

課題番号：23390491

研究課題名(和文)無医島に駐在する看護師の看護継続教育支援システムの開発

研究課題名(英文)Development of a Continual Education Support System for Nurses on Islands with No Doctors

研究代表者

八代 利香(Yatsusiro, Rika)

鹿児島大学・医学部・教授

研究者番号：50305851

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 5,400,000円、(間接経費) 1,620,000円

研究成果の概要(和文)：韓国の保健診療員2名と、米国のナースプラクティショナー1名について参加観察およびインタビューを行った結果、両者共に鎮痛剤やビタミン剤等の注射を独自に判断し、抜糸も行うなど業務の範囲が広いことが明らかとなった。

長崎県の離島の看護活動について調査を行った結果、長崎県は、離島が地理的に海路による回診が可能であるため、鹿児島県とは対策が異なることが示唆された。

本土との往来が困難な隔絶性の高い外海遠洋の無医島5島に居住する全世帯主を対象として、保健医療ニーズについて聞き取り調査を行った。今後結果をまとめ、無医島で働く看護師の継続教育カリキュラムを作成し試行した後に、システム開発につなげていく予定である。

研究成果の概要(英文)：Results of interviews and participant observations on two community health practitioners from Korea and one nurse practitioner from the U.S. reveal that practitioners from both countries perform a wide range of services, including making independent judgments about administering painkillers and vitamin injections, and removing stitches.

Results of a survey of nursing activities in the isolated islands of Nagasaki prefecture indicate that in the case of these islands it is, geographically speaking, possible to undertake the rounds using sea routes; hence, the strategies differ from those in Kagoshima prefecture.

An interview survey was conducted regarding health care needs. The survey targets the heads of all households residing in five isolated islands far from land in the open seas with no doctors. The authors plan to compile a summary of the results, create a continuing education curriculum for nurses working on such islands with no doctors, and develop it into a new system.

研究分野：医歯薬学

科研費の分科・細目：看護学 基礎看護学

キーワード：看護教育学 無医島 健康ニーズ 保健医療サービス 看護師 継続教育

1. 研究開始当初の背景

鹿児島県十島村(トカラ列島)は、本土との往来が困難な隔絶性の高い外海遠洋離島であり、七つの無医島が点在している地域である。医師がいない地域においては十分な医療体制がとれないばかりか、島民が最期をむかえるときに、住みなれた島を離れ350 kmも離れた本土の病院への入院を余儀なくされているという現状がある¹⁻³。

国のへき地医療保健対策においては、医師の確保が急務とされており³⁻⁴、医療を支えている他の職種に対してはあまり目が向けられていない。十島村に医師が常駐しているのは、一つの島のみであるが、七島すべてにはそれぞれ診療所があり、一名の看護師が常駐している。

しかしながら、常駐している看護師はそれぞれの島に一名しかいないため、役割が多岐に渡り煩雑化している現状がある⁵。また、代替要員もいないため島を離れることができず、研修を受けることもままならない状況から、最新の医療情報を得られないという弊害も存在する⁵。さらに、必要な医療行為を迅速に行う必要があるときに、現在の医療制度や保健医療システムが障壁となり、行えないという場面にも遭遇している。

一方、厚生労働省は、看護師が担う医療行為の範囲を広げる特定看護師(仮称)制度の導入に向けて、モデル事業を開始した。現在の保健師助産師看護師法に則った看護師の役割を拡大し、医師の包括的指示の下、一定の医療行為を行う看護師を創設しようとしている。このような特別な訓練を受けた看護師が、無医村において、医師が行っている一部の業務を担うことができたなら、医療格差の是正につながり、高質な医療の提供が可能となる。

現在のように医師の確保のみに奔走する施策から、他の医療従事者の力を引き出すことに視点を定める時期に来ている。十島村にとって、看護師は無医島に常駐する唯一の医療従事者であり、島民にとっての存在意義は非常に大きい。住民が住みなれた島で最期まで健康に暮らすことを可能にするには、常駐している看護師の力を最大限に引き出す必要があり、それを可能にするには、看護継続教育支援システムの開発が求められる。

へき地・離島における保健医療対策やあり方に関する先行研究は、地域を限定してのものが散見されるのみで、無医島の保健医療に関する研究は手付かずの状態と言っても過言ではない。国や県の政策は、医師を中心としたものが長年続けられてきたが、看護師については焦点が当たってこなかった。

本研究は、これまでの医師を中心とする施策から脱却し、島に常駐している看護師に焦点を当て、看護力を最大限に発揮した新たな教育・研修システムを開発するという試みであり、これが独創的な点である。無医島においては、本来看護師が持っている能力を最大

限に引き出し、それを実行できるような独自の継続教育システムを作っていかなければならない。

本研究により、無医島における看護師のための新しい教育・研修システムが提言されれば、看護師が活躍することで費用効果の高い保健医療を島民に提供することができると考える。また、他の離島・へき地においては発展途上国にも応用することができるものと考えられる。

引用文献

1. 伊藤雅治, 上田響他. 国民衛生の動向・厚生指針, 臨時増刊号第54巻第9号, 171-172
2. 野口美和子. へき地・離島の看護と保健活動の特徴. 保健の科学 2006, 48(9), 636-640
3. 波多野浩道. へき地・離島における保健医療対策と看護職. 保健の科学 2006, 48(9), 641-670
4. 鹿児島県保健医療計画. 鹿児島県ホームページ <http://www.pref.kagoshima.jp/>
5. 人口動態統計: 死亡場所別にみた年次別死亡数百分率. 厚生労働省大臣官房統計情報部 厚生労働省ホームページ <http://www.e-stat.go.jp/>

2. 研究の目的

本研究ではまず、平成22年度に行った無医島に常駐する看護師の業務について調査した結果をまとめ、看護師の業務を整理することによって、看護師に何ができて何ができないのかを明らかにする。次に、無医島の住民の保健医療のニーズについて調査をする。島民は一日でも長く島で生活をしたいと望んでおり、そのために、看護師に何を期待しているのか、どのような保健医療サービスを望んでいるのかを明らかにする。また、ナースプラクティショナーとして高度な実践を行っている韓国や米国でも調査を行い、業務内容、教育内容を比較することにより、看護師が自律して働くには何が必要かを明らかにする。そして、島民の健康づくりと最期を迎えるにあたっての看護師の力を最大限に発揮する教育・研修のシステムを鹿児島県保健師、十島村保健師、および鹿児島大学医学部・歯学部附属病院と共に開発する。そして、将来的には、無医地区で実践を行う特定看護師(仮称)の教育カリキュラムを導入および構築するための資料とする。

3. 研究の方法

平成22年度までに鹿児島県十島村有人五島での調査が終了している。平成23年度は、無医島に常駐する看護師がどのような業務を行っているか、国内格差は無いのか、引き続き調査する。そのために、長崎県五島地区を対象として行う。診療所で住民の健康管理

に携わっている看護師を対象とする。また、看護師がナースプラクティショナーとして自律して高度な実践を行っている韓国と米国において、看護師が管理運営している診療所一ヶ所ずつを対象として調査を行い、業務の比較を行う。これによりナースプラクティショナーレベルに至り、住民の健康管理に携わるにはどのような教育・研修を企画すればよいのかの資料とする。

韓国での調査地は、へき地に位置する ChunNahm Kwang Yang 保健診療所であり、調査対象は診療所を管理運営し、住民の健康管理に携わっている保健診療員である。米国での調査地は、オハイオ州クリブランドの郊外に位置するクリニックであり、調査対象は同じくクリニックを管理運営し、住民の健康管理に携わっているナースプラクティショナーである。いずれの調査も以下の手順で行う。

- 1) 研究者が現地に赴き調査を行う。長崎県五島地区での調査は、現地保健師の協力を得て長崎大学（当時）の松成裕子が担当する。韓国での調査は、大分県看護科学大学の李笑雨および鹿児島大学の白川真紀が担当する。米国での調査は、鹿児島大学の八代利香と山口さおりが担当する。米国での研究協力者は、ケースウエスタンリザーブ大学のエリザベス・マディガン教授である。
- 2) 看護師の勤務に研究者がそれぞれ1週間同行し、参加観察法を用いてデータを収集する。
- 3) 看護師が島での勤務で困っていること、改善すべきと考えている点を面接法で収集する。
- 4) データを質的機能的に分析する。

平成24年度は、無医島の住民の保健医療のニーズについて調査をする。鹿児島県十島村は、七の有人島があり、先行研究で明らかにされた島民のニーズには、「島（自宅）で死にたい」「一時も長く島にいたい」「鹿児島本土の病院に通うのが大変だ」などが報告されている。今回は、島民が一日でも長く島で生活をするためにどのような保健医療サービスを望んでいるのかを明らかにする。

まず、十島村の有人島のうち、本土に一番遠い宝島、中間に位置する諏訪之瀬島および本土に最も近く、医師が常駐する口之島で行う。次に、日本で最も離島を有する長崎県五島地区においても同様の調査を行う。調査は以下の手順で行う。

- 1) 研究者が現地に赴く。鹿児島県十島村の調査は、鹿児島大学の八代利香、白川真紀、吉本なをが担当し、鹿児島県保健師および十島村保健師の協力を得る。長崎県五島地区においては、長崎大学（当時）の松成裕子が担当し、現地の保健師の協力を得ることにしている。

- 2) 住民の代表を6名～10名選ぶ。
- 3) フォーカスグループ法を用い、データを収集する。保健医療において困っていること、求めていることを住民同士でディスカッションしてもらい、記録に取る。フォーカスグループのファシリテーターは、研究者が行う。
- 4) データを分析する。

平成25年度は、前年度までに分析した内容から、島民の健康づくりと最期を迎えるにあたっての看護師の教育・研修のシステムを鹿児島県保健師および鹿児島大学医学部・歯学部附属病院と共に開発する。開発された教育・研修プログラムを実際に運用し、改善点を明らかにする。

具体的には、附属病院と医学部保健学科が共同して、離島・へき地基盤センターを立ち上げ、へき地医療を担う看護師の研修をセンターの事業とする。附属病院においては、一定期間経験を積んだ看護師に離島・へき地での研修を課し、看護師としての自律性を磨く場とする。その間を離島・へき地で働く看護師には、附属病院での研修の機会とし、相互に交流をする。

運用期間を経て、最終的には、鹿児島県保健師、十島村保健師を加え、看護師の無医島における看護力を最大限に発揮する教育・研修システムを開発するまでとする。そして、将来的には、このシステムを活用し、特定看護師（仮称）の教育カリキュラムを導入するための資料とする。

4. 研究成果

平成23年度には、国のシステムのもと高度な実践を行っている韓国の保健診療員2名と、米国のナースプラクティショナー（NP）1名について参加観察およびインタビューを行った。保健診療員はパソコンでの記録、薬剤管理に最も時間をかけており、鎮痛剤やビタミン剤、蕁麻疹を抑える注射を独自に判断し、抜糸も行っていた。また、保健診療員の役割には、日本の保健師の役割が入っており、住民規模の健康増進について語られた。米国では、オハイオ州アシュタピュラでクリニックを開業しているNP業務を5日間参加観察した。当該クリニックでは family practice と occupational medicine が提供され、1日平均40名が受診していた。NPは、記録に最も時間を割いており、次に処方箋への記載、問診の順であった。昨年度行った日本のへき地診療所看護師を対象とした調査との相違点が明らかとなり、無医島に駐在する看護師の看護継続教育支援システムを開発する際に変参考となると考える。

また、鹿児島県と同様に離島を多く有している長崎県の離島・へき地の看護活動について、調査を行った。長崎には、75島の有人島と、30の離島・へき地出張診療所があり、医師が巡回している。准看護師が常駐している

出張診療所が2か所あり、一週間に一度の医師の回診に合わせ、診療が円滑に行われるための準備と、検査等の実施、急病人への対応、健康相談に応じていた。他の離島・へき地出張診療所の看護師の支援体制には、県の離島の看護師確保の対策の一環としてのアイランドナースネットワーク事業があり、長崎医療センターより2名の看護師が派遣されていた。長崎県は鹿児島と異なり、離島が地理的に県の中心部に近く、海路による回診が可能であるため、対策が異なることが示唆された。

平成24年度は、前年度に行った調査結果の確認のため、韓国の保健診療員を訪問し、追加の調査と資料収集を行った。その結果、看護師が農漁村保健医療特別措置法の下、保健診療員として自律して高度な実践を行っている実態だけでなく、保健診療員の教育カリキュラムについての情報を得ることができ、無医島で働く看護師の継続教育システムを開発する際の参考となると考えられた。

平成24年度の調査予定は、無医島の住民の保健医療のニーズについてであり、一日でも長く島で生活をしたと望んでいる島民が看護師に何を期待しているのか、どのような保健医療サービスを望んでいるのかを明らかにすることを目的としていた。フィールドに予定していた無医島は、南北160kmに渡り点在している島からなり、最も近い島でも本土から350km離れている外海遠洋離島であり、フェリーが唯一の交通手段となる。

しかし、調査を予定していた平成24年の夏から秋にかけて、相次ぐ台風の襲来と悪天候によりフェリーが欠航となったため、計画していた日程での調査が相次ぎキャンセルとなった。そのため年度内の調査自体を変更せざるを得ない状況に至り、次年度に調査を繰り越すための計画変更に向けて、鹿児島と大分で3回に渡り研究分担者と研究打ち合わせを行った。離島での住民調査は、一部のみの実施に留まった。

平成25年度は、無医島に居住する住民に対して予定通り調査を行った。研究代表者と共同研究者が無医島の存在する2つの村役場を訪問し、担当者および当該保健師に対し研究の概要、目的、方法を文書と口頭で説明し、研究の許可を得た。対象者は、本土との往来が困難な隔絶性の高い外海遠洋の無医島5島に居住する全世帯主であり、研究者が各世帯を訪問し、調査票を用いて聞き取り調査を行った。調査に関しては、事前に聞き取りの姿勢・態度・技法をマニュアル化し、調査法の一貫性を確保した。調査内容は、自身と家族の健康についての認識、将来暮らしたいと思う場所と理由、島の保健医療サービスの問題点、看護師の業務への希望、島の保健医療サービスに対する自由意見、である。

調査の協力を得られた世帯主は、A島19名、B島16名、C島52名、D島17名、E島17名であった。データ分析は、量的、および自由

記載については質的帰納的に、質問紙で得られたデータは、SPSSを用い集計を行う、自由意見は、意味内容のまとまりで切片化し、類似する事柄をまとめ、カテゴリ化する、の手順で進めることにしており、現在、進行中である。

分析が終了したら、これまでの研究結果をまとめ、無医島で働く看護師の継続教育カリキュラムを作成し試行した後に、システム開発につなげていく予定である。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計 0件)

〔学会発表〕(計 1件)

1. 八代利香: 会長講演 チーム医療における看護の果たすべき役割と倫理, 日本看護倫理学会第6年次大会, 平成25年6月8日-9日, 鹿児島市

〔図書〕(計 0件)

〔産業財産権〕
出願状況(計 0件)

取得状況(計 0件)

〔その他〕
ホームページ等

6. 研究組織

(1) 研究代表者

八代 利香 (Yatsusiro Rika)
鹿児島大学・医学部・教授
研究者番号: 50305851

(2) 研究分担者

松成 裕子 (Matsunari Yuko)
鹿児島大学・医学部・教授
研究者番号: 00305848

山口 さおり (Yamaguchi Saori)
鹿児島大学・医学部・助教
研究者番号: 10404477

吉留 厚子 (Yoshidome Atsuko)
鹿児島大学・医学部・教授
研究者番号: 40305842

李 笑雨 (Ri Souu)
大分県立看護科学大学・看護学部・教授
研究者番号: 50448825

吉本 なを (Yoshimoto Nawo)
鹿児島大学・医学部・助教
研究者番号: 90452937

持留 里奈 (Mochidome Satona)
鹿児島大学・医学部・助教
研究者番号： 00613671

(3)連携研究者
なし